後拾遺

和書門類
四三三〇六
一三七函
八架
二冊

内閣文庫
和書
四三三〇六
二冊
二〇〇函
七架

上

和歌
四八三

内閣文庫
番號 和 43306
冊數 2 (1)
函號 200 64

200-64

綴じ部（喉部分）の文字など開きが不鮮明な箇所あり

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan

後拾遺和歌抄序

つの宮あめつちの名をさだめ給ひしより
四の海浪の都をしめ給ひ
ふることきゝつゝ世ゆく事ハしなよう
日のうゝ地りよつゝとゝ日を指月の中に
花の色月の秋ハ日ふ仁なをにのそえ
てむかしくをうかゝてくあ世たゝ道
ふるとて地ゝさゝひ世ゝ成ゝ人月
りあさ月風ふあさひ事ゝ仁毛を

江戸幕府文庫

もてあそひ鳥をあくまをさとい梅まを
仁ふ小おかせあそひの何まりり數鴻
乃や海ふこ平あつめさ世行ぬおとあり拾
遺集ハいゝ古中仁乃ゝ寄と乃
祭をしゝくさかをあつむへをりなんを
ゝ和かせとう世こ海ゝ毛ゝ乃ゝてあし
ゝふみふとゝ乃ゝとう世寄ゝ毛ゝ乃ゝ
ふふと海ふとふ志ゝこ乃ゝ仁かせ世ゆ
ゝ毛ゝ心かゝゝ序を

四の長秋よりなを四ふりかへり應法師て
絶の心ちしなつ見れは月つてつひまを長い
おろかに思へてつひにさとり拙かりていつ
へいと海もさまたけをし拙てつひに仏門也と
おいうへすると思ふたまへしかりなるおとの
そうきに河内なふ法師つうんかりにうる事ハ
古今後撰拾遺よりをそひとるへすると次
うへかの方秋の也つさ世うかなく芦
さつの舟のさうおはつまと中比を見こと
と云いて毎年のにうりてあそふ
毎歩もあり天暦のすゑ長月ふよ、うるて
世七十に成ぬすると云しとしを百色
あまるとみうひふれ世紀ふうすみうし
松人くあ也つ毎すにてきて真仮名
ひとしかまて家こへとの系拙くてりを
ふりおとをえぬみうを長きてこと
志つさうそうすかす道祖と伊勢山賊
へ屋し事事そそうう事かしする

秋の月のかすみふかき春の色のよろしあるを
をしらうとふるこゝろもはなはだしくえらばれて
えらばるゝ事なりかつは後拾遺和歌抄と
いはれ侍りし古今後撰の二集より所
入られたる人家の集をもなるべし人も
つまくてあるよし江のあらしはさぶとも
さえてかりあるべしはなはだよろしき歌
はかりいつれも人とはいふべきにあらず
ものゝあはれをしれる大中臣能宣清原元輔

源順紀時文坂上望城小野道風紀貫之
家の心ばせ人にすぐれたる兵部卿
宮の人々なりしかども人の所にて
酒の世のをこなこの道にたゞまして
かゝつさのりうるふをいまだしり侍る人
きく事をとゝのへしらぬ事と思ふ
おもひつゝふるまひて世の所に成て
なんぞうたてあるべきあるべしとおもふ
あるべき古歌にかゝるべきといふ人あるこ

いさゝか所〻をとりて小集成るを事
ふるまひまゝにあらゝなるのゝことは
万葉集廿巻をえらびてつねのもてあそび
もの〻行自りかの集の心を取せきと
成りてかゝることを事をあつめとゝのへ
ものいまの世のかなをまぜすくはの
延喜のひとつのみかどの万葉集のかのうつし
ものをえらびて世のうつりゆく人行てゝいゆく
古今和歌集ゝ出れり村上のゝこの代

よ八古今和歌集よりこの方千とせ世
えらびあつめる後撰集とゝ別くゝ又花山院
さきのゝ集りゝ〻この方千とせ世
ひろく拾遺集ゝ別くゝまゝ自分のよの集
さきとゝ〻えゝぬのゝおくていの海ちもぬ
こゝのゝ大納言公任みうの卿あまのじ川ゝ
ゝ人ゝ卿ねをいてゝまゝ後かゝ人なりゝ千
もちなまをいゝちゝをとゝ出ゝ又成の書
ちゝ千年成あゝをて世よりゝ人ゝ出ゝ

つゝかの〜須屋浦とゝまりおり侍事
ゝ出てとゝゝひゝくゝもなりつゝ世中にはなれて
人の心ゆきうつり世又ゝ屋まと言を
ゝゝひて人ゝさうゝ口心よりはつゝ言葉を
あつめて書きまとゝかゝす集と言りと云
ゝ所ゝ書ゝ道ゝゝなりすく孫ゝ所をかき
ゝうて金ゝ屋の集と世ゝ別けうゝゝと
て治りあゝえ道ゝゝゝ言葉ゝ情ゝゝ所ゝよう
こゝゝゝゝされ集ゝゝゝゝこゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝ歌屋ゝゝ書ゝ心ゝゝ屋浦なゝゝ
心ゝゝゝゝゝ事ゝゝゝゝゝゝ紙周ゝ師と
ゝのゝゝゝ心ゝ山ゝ跡ゝ祢ゝゝゝゝゝ
人ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ世ゝゝゝゝゝゝ人
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
の集ゝ人ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
おゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ものゝ集とゝのへあゐしてその業に屋しくすかる
ことひとつゝの物ありまれなるゝ所にて道の志にて
うゝ是をゝゝ以て平にそなるつゝひとゝなるゝ
ことゝて山川をうまてみゝ水上いとくゝ
うちより物とゝのうみくゝ山をうまてゝ
河のほとりゝ志ゝ行まはゝ物集りてせうゝ
平をかるゝすゝ云ゝ次ゝ中に屋ふゝ
とゝり石ゝをふもゝのもゝれる事ゝ
はも有ゝ屋ゝ平ハゝ道ゝ
ゝてをうゝ

ゝゝにゝをきまとゝ業もゝ屋ゝ
ゝ屋をゝゝてゝ
ゝゝゝ事ありゝ集て屋ゝ
ゝゝゝ屋ゝゝ
ゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝ

はるかにえをもとめゆくをゝもふ心ゆく
えゝ〳〵ほゝゑみしたゝ〳〵ひとりあるを
ゆめのまよりひろえていりあるをゝもふ
とゝふきゝうせにけり事にはなるとてすゝかるん
おうき秋つ和にくるねのつゝりとたゝるを
みてつゝをもふをめまとハれゆきこの産
つ秋つきゝしのゝうひまゝ
りをゝありけりとゝて

後拾遺和歌抄第一

春上

正月一日まゐり給ふ

小大君

ふるとしの春のはじめにかくしつゝ
みちのくにまでいかなるらむ

光朝法師母

やすらはぬ人の家もたちわかれ
春の東にとまるとなるらん

源師賢朝臣

あづまぢにまかりけるに関もあらぬ物はいそのまつばかりなん

春の月日まゐり給ふ

権僧正朝尼

逢坂の関をゆく春をとゞめつゝ
春はいかなる山のとりかは

寛和二年花山院并合ふすまの歌

大中臣能宣朝臣

春のくるあらの山のうぐひすは
年こそかへりに山ぢ
のこゝろ
人ぞ

山寺みこ正月ち雪の中をとんでよりう
雪ちりて花ちまとふ山里はいふしてか春をしらん
年為感
春をしらぬ
かはかりなる
あさくも花春の人ちりぬ
天暦三年よたの政大臣の七十賀し給
けう屏風ちよりう
大中臣能宣朝臣
立つの春海の苦の下根に寄汀のあう春
一條院御時殿上人春の年をてあ
給ふ道なりう
今日春の山ぬけ花ふ
花山院の御合ふ
藤原長能
谷川の氷もまこ清あ
春しし波
春をしらぬ
藤原隆経朝臣
春家の屏風とう紀とふ
和泉式部
鷹司殿の七十賀の屏風ふ

客かきたる所をよめる　　赤染衛門

紫の袖をつらねてきたるかな春たつことはこれそうれしき

春の臨時客をよめる　　小弁

ひきつれてくる大宮人も春をへてかはらぬ色をみえし

入道前太政大臣大饗し侍りける屏風に

臨時客のかたかきたる所をよめる

藤原輔尹朝臣

ひきさしに紀もあまたの緑もうましてきみか代のためしにかきらなかりけり

おなし屏風に大饗のかたかきたる所を

よみ侍りける　　入道前太政大臣

君すめと座りつる佐さかりしもてまへの雄なかりつらん

民部卿泰憲近江守に侍りける時三井寺にて歌合し侍りけるによめる

讀人志らす

春たちてかはる白雪と鶯の声ちりぬとやいそきみゆらん

鶯とよめる　　大中臣能宣朝臣

山さとの雪のうちよりうくひすの声のきこえぬ春もかなれり

正月二日あふさかにて鶯の聲を聞てよ

伯爵

春の里へゆく人あらばとてん子宮城で更つて

選子内親王に問きとやまの時四月三日

上達部あまたまつりて梅うえとふ題をとらし

てのちひ伯爵より内侍にけいすらあ

よみ給ふ

よろこんで

降つん雪ぞ春の山里とうち霞の彩

かゆ中ゆうりうに雪面にてうちひすのう

ときてよみ給ふ

清原元輔

源兼澄

寄月恋

後撰別殿の家にて春の山里よりの成長ね

とうの心をよろ

藤原範永朝臣

題しらず宿を霧よりしめて石の宮ひと形のうち

小野宮太政大臣の家より子日し給ふ

よみ給ふ

清原元輔

ちとせつん宿の子日に松ばかりのうめまいとうんと

すん

紀貫之

和泉式部

引つまてをの子日の松ねなくを手をとりあひ引ろ

四月廿日よりあつかはりてねなとてすさひより

引伯爵家にてよめる

讀人不知

春の野は若菜摘まんとやなりけん
四月子日まあ毎にて伯爵の良運にし
てとて神のひしにぞいとゝいとゝ
りをこせて伯爵に送りもせて日言ま
ゝ

賀茂成助

年の君へのみ子野遊にまゐ日にて人のまつとゝ
今上六條まゐ相けりして上達部うつのをの
ふるまひとゝ中納言ゆりて神のひし伯爵

右大臣小弓

袖をしてひきうゝ
三條院御時上東門院歌合に
とゝ伯爵
相撲とし伯爵
けとめ

女伯爵

右大臣小弓

堀河右大臣

と西の子日の
見し次
後冷泉院御時

民部卿経信

後冷泉院御時

第暦二年内裏の詩合ふみ作らる

右兵衛中将公實

是は世をすてゝ遁世日すなわちのぶをもとめわかれ

正月七日丁酉あかつきとて京へ侍らせ

よりて

伊勢大輔

人をわかれ舟のゝ水ぬるゝよりゆくすえの口ふかくつゆ

正月七日卯日にあたり侍らせ今日

うけたまはりつゝやすと通宗朝臣のもとに

いそぎをこせて侍らせ八ようの

卯杖つきたてまつりかきの角さうふ是ふひの口ふく侍

大中臣能宣朝臣

たゝ者つゝまゝ者里者

和泉式部

其日殿上人のこつぼとをひつゝおひつゝ

後冷泉院御時皇后宮侍会ようゝ侍らせ

中原朝成妻

つゝとり人人に詩をかゝせ侍らせ

正月七日内侍のをとにつかはしける

藤三位

かすゝ源のさゝ今年新宮に新すゝ宮に紫菜

長樂寺にて

大江広言

山さつき花の色をみるにつけても
ほとゝぎすの声ぞ聞まほしき

徒同法師

ほとゝぎす
聞きゝ次

藤原定家朝臣

春なれば
なほ
ほとゝぎす
聞まほしき山里をたちかへりてふ人のあるに

藤原節信

春なれば
なほ
ほとゝぎす
聞まほしき
ものとて
ほとゝぎす
聞まほしき

曽祢好忠

ほとゝぎす
聞きゝつゝのみ日を
経れば
ほとゝぎす
聞まほしきの
ほとゝぎす
聞きゝ次

徒同法師

ほとゝぎす
聞まほしきの
ほとゝぎす
聞きゝ次

よみ人しらず

なかなかに
ほとゝぎす
聞てはつの
ほとゝぎす
聞まほしきの
みえこそすれ

柿僧正都因

春駒
はなれ
あそぶ
ほとゝぎす
聞つゝ
なかめ
くらす
ものとて
ほとゝぎす
聞まほしき

長久二年弘徽殿女御歌合

国立公文書館
National Archives of Japan

春駒とよめる　源兼澄朝臣

立ぬれば春のかすみの衣をば
屏風の絵より馬の新しきなり
馬の背くひしをすて春人の
眺望する所によめる

藤原長能

うぐひすのなきてはるかぜ
野にいでてみまくほしきの梅の花
野にいでて春の野にいでて
後六条院御時后宮の詩合に
とよめる　藤原範永朝臣

和泉式部

春の野に萩のうるはしを
屏風に

花なくて春さりぬれば
屏風の絵に梅花ある家に
花ちる家にたちこきたる
不詳よめる

平兼盛

ひとめ見しはつかの花のうつろひ
ある所の詩合に梅をよめる
梅花ゆゑにあらぬ人もあるものを
春の雪の風にまがへて
とふるとよめる

大中臣能宣朝臣

前大納言公任
春の風にまがへて梅の花

題不知

大江嘉言

ひめうえに植つる百ハ[illegible]の内小さきひとせ[illegible]
我宿の梅のさかりに人〻おとろくばかり袖う[illegible]
[illegible]ハてわるやとよみ梅さかぬ道より人もみまとさ[illegible]
山家梅花をよめる　和泉式部

梅の花ちるを惜まぬ山里ハ月ふる人の心なるみな
春風夜芳と云ふ心ばせする　菅原孝標朋

ひめうえに花かくりに咲ぬ[illegible]の黄屋に風ふきそうれ[illegible]

村上御時れいの歌合の時の梅の花を人〻よめる　清原元輔

梅花香をとめてとうすもてくらう[illegible]
山里ハすみ侘ぬる梅花とよりつる宿の[illegible]梅の[illegible]
[illegible]しハ　讀人しらず

[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]
[illegible]　[illegible]

梅の色は雪にまがへて匂ひけり

素意法師

しめつゝは花にぬはれてまつ春の
ゝ家の紅梅をうつしてもかはに
思ひ出すうゑていにしへ春の
しのびつけ給へる梅

弁乳母

かへりみの自ひなりぬる梅の
もとにかはらぬ花の
ちるかな

大江嘉言

うの花とふる雪とうゑて梅のはなりたるうゑて

風雪のうちにさきぬる梅の香はいづくの春をしるべけん

清基法師

道雅三位の除の家の隣りの人の家
小梅の木あり雪にぬれつゝ宿へ
帰る春の人

藤原信衡朝臣

水邊梅花といへる心

平信章朝臣

すゑ遠く人のもとへ歌を
書きて梅のはなの
ちるを見て

[illegible]

上東門院中將

[illegible]

小弁

[illegible]

赤染衛門

人の雁をけうとくなれるとおもふ

藤原道信朝臣

[illegible]

馬内侍

[illegible]

津守國基

[illegible]

弁乳母

[illegible]

屏風に二月ばかりの山田つくるところ

[illegible]

大中臣能宣朝臣

[illegible]

天徳四年内裏歌合に御製よみ侍

[illegible]

あるじの法師に川もとの柳のいとをかしきを
柳池のみなそこふかしとこころにかけよとの
藤原經衡朝臣
池のみなそこにかけもとまれる柳のいとをかしきかな
藤原元真
浅みどりかしまてなびくあさの柳の糸はみなそけり
二月ばかりに良暹法師のもとにまかりて
物がたりしてあるかたにてはるかなる山の出あるを
ながめていとをかしかりしかば
藤原孝善
長家の川ちの山のかすみてをりしかばゆくへもしらぬ
人にはなれて海のほとりにかすみたちこめたる
をりはまたつゆのいとはけうなり
藤原隆經朝臣
山桜はなのゆくへをしらぬまに人の心をそめてけり
きさらぎのつごもりにひむかしの後經朝臣の
伏見の家に人々あつまりてもてあそびけるに
藤原家業朝臣
うぐひすのこゑにまかせてあるかなる春をもとめ

花見に侍りけるに人のもとにさかりなるをこ
とゝはるとて　　賀茂成助

こゝ幾度咲散てあらはれぬ出んさかりを待とやきて　　日と

永源法師

梅花さかりなりけるを見てよめる　　中原致時

むめゝと梅の花香にそめて柳の枝よりをしてふ

あはれとは思はるゝかな梅の花をりてふ人の手をかれ

梅元任

一條院御時殿上の人々花見侍りけるに

女のもとにつかはしける　　源雅通朝臣

花見にとて出て八重山吹の花をたをりて人さ

ゝ

威子

はるゝてからはるゝ山吹の風よりあふ行末の白波

後冷泉院御時うへのをのこども花見に

さうして平等院にまゐりて高倉の一宮

つれてまゐりてまゐりて侍りける

一宮後行

心をのこゝろにえらび侍りけるに歌めゝ人々をれやはする

今上御時殿上の人々花見ありける出
けるに道より中宮に言はせたりける人のもとへ
右大臣小方
あくがれ心ゑ見ん山櫻
障子の絵は花おもしろき山里は女あるべし
源兼澄
とまれと咲しこの花はいくしほ色かさりをそさらん
紫宸殿親
いつまでとつゆきてゆくまに山櫻かうゆ枝しるべは
菅原為言

山櫻
小弁
遠き花はなほ見ぬ人の目をぬきて
長樂寺に行ける比春ごろ山里に
さくらはいとをそきあり今年はいかに
上東門院中將
にかよふ風の心ゑにてはるよりはうき山櫻
白河院おて花をよませたまふ
民部卿長家

あつまちの人のよりとりて白河の関まかりやまと
南殿の櫻をよみて　高岳頼言

見るこゝろ色のみえてあるかなしうのはのこゝろ平まみ給ふに
花よりまことふかきこゝろ

まことをよみ給へと櫻花　太宰大貳實政

花はなほ行すゑはよるかな　大中臣能宣朝臣

櫻花ちるを見給ひて　河原院

河原院あるこゝろふかき櫻をこそよめ

たゞとをミ　平兼盛

夜思櫻とふかき紙よめ　能因法師

さくら咲春はたゞなりあるを世にまれ人の心を通
櫻花うつをきくはあはれよめ　よみ人しらず

極楽往生願　櫻花句入てそかゝる

遠き所にまうでそめし頃桜をこの所にて
すこし侍りし
和泉式部
かの〳〵ふるさとみせもとめ〳〵かの桜一枝もうの郎
とりもとめ侍りし
人もとめ宿の桜をうつしうえ侍りしを
つぎの宿のさくらひさかりなりしかば
花みるとあくがるる心はなれてやつれそめにしわが
道命法師
世中にいとゆ歌のまに〳〵山桜もみるかなの心なり世は
宗教記
なにうき事侍りし頃紀伊のくにへまかりけ
藤原公経朝臣
花みるそ方へうき事もつもりぬるなりけ
俗世を大臣の九條の家にて毎山春あり
こゝろ〳〵侍りし
前中納言頭春
つぎの宿の桜をみてよめる
藤原元真
はるかに
はるひて春のうつり桜色はるかにのなる海
第暦二年内裏詩合よめる

右大弁道俊

屏風に懐人花の下成よめる

平兼盛

もろこしの家路はとをくこの国と妹やすんと
屏風の絵は三月花宴すると
きくの下成よめる

ひらせをいとひもこねる春雨をたれ
後法皇院春宮と中ゐのきこと
花みよそをの林院よりけるよみて

良暹法師

うらなすに出る人のうらはとをくこの国をうら
通宗朋法師

源俊頼朝臣

山桜をまこの三四人をまこの花のみなるらむ
宇治の大政大臣花見にまこの
きけり

民部卿為忠

河の水の花をまこの人出る
はるかむ人を見なる花をまこの

八重咲の道とも三月尽のころに白河よりうつる
けるに城国て相模つまとりとも有るハ
こゝをこせて侍道ハよめる

中納言実頼

梅花さくとはなき門なれつゝもさき道さうの利
遠花惟家うとふ心ゆよめる

枝と宣成

花なくて世に梅の白ひ紙つゝ宿梅とみるん
年とに花とみうとふ心ゆよめる

源俊頼朝臣

春ことふみ道とも梅の咲まさるん
加茂院の花さうとよ思ひてひんてなて
山の色見ゆまうとあり き道は宣旨
おた改春守つてこゝというなる平
つゝみうなとそこて侍道ひたく
田今は侍くさうへ春平おうとよみ侍
ら民ふかくゆ世ゆ侍ゆうて侍ゆう

能因法師

世中とうなて朝のまとをへうとと花よみゆう
道城国てを改立ゆあんまとうと

ひとくさにて言ものをうつるとなん
云ける人の歌
義仲は海ゐるとてうりうにはかはかまうち君
ゐつつ言葉なとの事ゆゑ心ゐて氣仲朋臣
ものとりけるけ詠ける歌
世の中も秋さめぬ桜花昔の袖は変てうし
言金ゐて言ゐつ世房毛ゐんゐ白河はさら
出てけるうりまみ伯うう
伊賀少将
なるゐ海毛のうみゐ思ゐ白河の毛ゐりき

内のれいはうりきこの家中てくさけさう
毛ゐ平ゐみ伯うは遠山桜とのもと
云ゐ海よめる
大江匡房朋臣
言砂の言ゐの桜咲ゐ海ゐうゐるゐん
遠山桜こふゐ海よめる
藤原清家
吉野山ゐ利箭の白雪ゐ言ゐ花とうゐ
用所ゐうるとうゐ
と情と云ゐ海人ゐ
藤原通宗朋臣

[illegible]

花下に海と云ふ所なり

良暹法師

[illegible]人を宿とあるじ山櫻ちりてのちは主も客も

碁長中納言家に侍りける頃花見に侍りしぬの

衣を[illegible]法師にて[illegible]時分

けり

加賀左衛門

[illegible]ねをせんれんの木のもとにて[illegible]

家に障子の屏風に櫻人の[illegible]を

みるところ

源道濟

[illegible]櫻[illegible]

[illegible]屏風の絵に櫻の花ちる所

[illegible]人[illegible]

つの宿にきみにより櫻毛[illegible]

大納言公任花つさるとにこんとそとつ

[illegible]

中務

[illegible]年初め

花をみるとなんほとけのやこしてけるよりそ人成

[illegible]

後拾遺和歌抄第二

春下

三月三日桃花咲れらんとて

花山院御製

三月の三日の桃花咲なとそかりそめにもとをつけそめんる

三月の三日は桃花あるをみるとよめる

清原元輔

あかさは毎年ことに桃の花もらくるもの花なれ

世尊寺の桃花咲るをみてよめる

生昌朝臣

多里の花の盛に世をすてんとおもひ侍りしかは

永暦五年三月祐子内親王家歌合

うこの鶯の鶯の鳴をきくなる

堀河右大臣

櫻花あかぬ色にしふかくはまさりけ海

題しらす

内大臣 頼宗卿通称年

行春をとまらぬ物と思ひしを桜をすてす

天徳四年内裏歌合

平兼盛

よそのみにはるかすあれ桜をわれ人つたひをき

櫻花をきかんとてかの所にまかりたりける人の行ぬしなる
屏風の絵に櫻の花をかきたりける所をみてよめる　大中臣能宣朝臣
正徳のこゝろをよめる　源道濃
山里はあくるそのゝ色ぶかし　詠とさゝやくとなく
太神宮の屏風をかくべき事をたのまれて
年ぬけ国ふるそのゝ色ぶかし　清原元輔
ゆくかの宮にいたりて櫻をかくべきこゝろをよめる
なにはなる宮ぢにいたりてよめる　右大弁通俊

志賀ゆきのこゝろをよめる
山路の花をよめる　櫻成元

櫻花をみるとて人さそふ志賀の山越
陳花をよめる　坂上宣成

はるゝ色をこゝろにいれて春風に花をもとめ
花の色はあくるをよめる　清原元輔

花の陰にて酒をすゝめ侍りけるに
第百三番の後番歌合りよりよめる

菅原通家朝臣

はるかにはなをこそ思へとはるかぜ
はるかに
いかばかりはるかぜはなをみすらん

永源法師

三月尽のころ花の散るをみてよみ侍る

大納言公房卿

うつりゆくはるをおしむ心ばせはのこり
なくはなのかげかな

永暦五年六月五日祐子内親王家歌合に侍りよめる

大貳三位

吹風にたへぬなごりをしのばるる
はるかに
春をへて花のにほひはかはらじを
家の梅のおくるるにつけよめる

中納言宗頼

大江素言

こしぬけの人をみるとて梅花のいまさかりなるを
白河にて花の散るをみて
よみ侍りける

中御門右大臣

山ぢまで世にもめでらるる白河の
桑田の右大臣家にて人々あまたあつまり

伊勢よめ

春原為時

さくらをも咲へき花もさかりなる心ゆくるる
庭の梅はいかなるよめる

和泉式部

風ふけば咲そ散ぬる梅の花みるしるしなしみるしるし
三月尽なる野辺をみ侍りて

春原義孝

散へくもあらぬ山ひの月のうすてまこうつきさて
ひとしなよりて

和泉式部

岩ぬ[ぬ]ぬりてうみるせこうに紅波の末よ似る色

つきもこの波の末をみるつさとしわる岩ぬ[ぬ]ぬ
月輪と示よきうをそえ浦恵慶法師

おとるふ屋の菊を侍てあそひうるみ
伊勢

菊の色はうとる色ふ屋色は思をけわ流ろ色
けり

大中臣能宣朝臣

紫をやしかぬろ菊の色池みるひ[ひ]ぬ[ぬ]ぬ有
けり

藤原義孝

市ちて色ぬりてうさせはこさ京つうそゆひの色つ京
ん

源為善朝臣

祈安御

義暦二年内裏八講会に藤原為家卿

大納言實季

小屋を宗者にみゆるは岩の岩はなにうゑる菊

國平泰憲近江守

水に詩合に行ふ月は月寺

詩人志

もみぢの松緑に紫色にそめなす菊の有限

影ーー次

藤原伊家

名にたてしみてを極りしこれ

大蔵高遠

沼のあかつきの水にもしてしまそ屋の心次さうかりれ

長久二年弘徽殿女御詩合に蟬とよめる

良暁法師

みうきまてもそうく蟬の羽にいとはるる秋の風

影ーー次

藤原長能

物をこそ思へつまとの百年にはなれ長きあらぬ

法橋如願命法師

まかりたる秋ふこと無の内は

法圓法師

つまとなりて物をはふこと色にふる物をそ思ふ

三月つごもりの頃郭公の鳴くを聞きて

侍けり　中納言宣頼

時鳥思ふもかなわぬなげけとぶらてそまてをつる

三月つごもりに情春の歌人ともあつまりて

大中臣能宣朝臣

なつてきぬなのみ名のみいとしるく鳴ぬ時ぞ人に

三月つごもりの日ぬくのくふ所にて

よみ侍

永胤法師

ほとゝぎすなくこゑ聞くとて野ふかくいりぬる人の

やまさと

後拾遺和歌抄第三

夏

五月雨はよりて　和泉式部

橘の花の袖にかをるとて　衣にぬきかへてとゝ郭こゝろのうつり

五月一日郭こゝろ紙の約束紙よりて　藤原明衡朝臣

昨日まで花にたゞしみ侍りしを忘れて侍りしまゝ郭

橘の花の袖にかをるとて　和泉式部

五月雨の花の袖にかをる時ぞ生ひ初めしかの人ゆく

冷泉院春宮とゝ中ゝ侍りける時百首歌たてまつり

けるに　源重之

夏草は思ふ心をしるしにて花ぞ恋ひしきやまとなでしこ

題不知　曽祢好忠

さゝきこそ卯月はなきの葉柏もてつゝ

山ぶきの水鶏をよぶなる

大中臣頼孔

屋へ　けるひとゝ門のいるをさしやかくとて　くすのそ

山里卯花咲すこゝろ

菅原道宗朝臣

[illegible]

武ア卿泰憲卿

[illegible]

[illegible]

題不知

[illegible]

ある所の詩合り卯花をよめる

大中臣能宣朝臣

[illegible]

西子内親王の絵合しける時の障子に

桐模

[illegible]

卯花をよめる

伊勢大輔

[illegible]

雪とのみあやまたれつる卯花をよそにてみゆる所ぶく詩合しける

源道濟

[illegible]

元慶七年

いつか宿のまかきならねと郭公いつ里をまつし卯の花
題しらす　慶範法師
郭公我もまてこそ心みれかわりふすこのころふはまた
皐月の毎日に右近の馬場に郭公きかんと
てまかりけるに夜ふくるまて鳴侍らさりけれは
堀河右大臣
いかてかは為ねをもりあかしてきゝ[illegible]さても宿にかへらん
道命法師山寺に侍けるにつかはしける
藤原高忠
あくに我きゝつかはしらさらな山の郭公いふらのみなくらん
なし
道命法師
あひみての郭公こゑは聞けりこそ鳴らのかたもゆへしは
禖子内親王家荘のいつきときまいりける女房
そ侍けるを聞て後三条院の御時斎院
なり侍りける人のもとにいひしと思ひ出のさ
の日神まつりけり侍る
皇后宮美作
きのふかは神山の郭公あつまもしのゝ[illegible]なし聞つと
祭の使しく神まうて侍るに人にかはりて
ふかくひとりよとおもひ侍るに我大蔵卿長房みて

物へまかりける道にてつかはしけるに

備前典侍

かくて我なくなるこゑをきゝてこそ郭公をまつもかなしかりけれ

四月ころ有間へまかりけるに時鳥を
かくれて待ける人のもとにつかはせて待道に

大中臣能宣朝臣

関すてきつるこゝろはいかに郭公
いかにへ我よふる事伝へけむ待えて郭公

きゝてよめる

増基法師

こゝにしも待ける郭公さもなくなく
ねられぬよ

題しらず

橘資成

よひのまはまどろみにけり子規めさましてとかたる人もしる

永承五年六月五日祐子内親王の家の
哥合によめる

伊勢大輔

きゝつともきかずともなく郭公心まどはすさ夜のひと声

能因法師

夜だに明けば尋ねてきかん時鳥信太の杜のかたに鳴也

藤原兼房朝臣

夜の更さてもや寝ぬと時鳥ほのかに鳴ける人はきくや

小弁

祢ぬ義にて枚つるとぬ道之祝きてかなと紀ニ多はり
祐子内親王家より侍令しゆ給ふうとて返
人〻おなし歌ゆみ給ふうり

宇治前太政大臣

在明の月ふあまの河ゆ舟をこ
宇治前太政大臣三十講の後侍令し
給けるよかとおなしをよ侍ふう

赤染衛門

明ぬ秋ゆ夜もさふ郭公待つ地ゆ紀ぬ
秋をよ侍つ地ゆ紀ぬ

桐模守にて明り給ふうしおそて牡丹花
そかとおなしを給てよめう

大江公資朝臣

あすかの思出せん郭公
時鳥をきゝてよめる

牡丹花中の歌

法橋忠命

関つるやえつねかなるん郭公おのれ花をそうら給ける
長保五年六月十四日入道太政大臣家の
侍令ゆ遠関郭公と云ゆ紀よめう

大江嘉言

八月十七日 雪示四手郭公て一首の心をこたへ
五月雨の長夜を郭公のはつこえ
杜鵑行かとすて雪川遠こそてのこちも祈る遠さうな
ほとゝきす聞ふ郭公なき郭公
おれ屋けのれかこそ物ふ人のうとおもふ
郭公城間てよめる
道家法師
一郭公きてかたらふ時雨ふるなかなかなる郭公
雨ふるなかなかなる郭公
雨間法師
律師長源

時雨こかのめしひ人ふるけめ雨一夜あ雨の成
まさめ夜も行夜もこゝつ時雨花梅ふ行ふ
大貳三位
小弁
梅てのこつ人を行ん郭公花ふ宿ふ行ん郭公
又尚ふ郭公
曾祢好忠
ふもとふ川ふ郭公ふ川ふ郭公ふ
永義五年五月ふ蜀上の根合よ郭公
藤原隆資
五月雨ふ日ふ蓋ぬ山田ふ遠ふ山田ふ

宇治前右政大臣家より三十講の時所合
しかるべき月毎に供奉せしめ
桐模
五月毎日三つ巻みす紙の
富門院経長の桂の山庄にて五月毎日とよこ
かるべき
藤原範兼朝臣
さうこと月みしかしての原をなかめて沿ぬらんと
津国のことと絶せぬ事五月毎の事なれば
こゝろ
叡尊法師
梅後僧朝臣
五月毎日の事なれば
五月五日はすめらうのおほせとてよこかるべき
恵慶法師
書紙をめてふ人あるべき歌の事
永暦元年五月五日殿上の根合よよめる
良暹法師
しくれは江の屋の事の紙よりひけるあやめの根にて
右大臣中将にて侍りける時平合しかるべき
大中臣輔弘
園の人々物をそやしあやめ草ふきてうよおほせ

[illegible]

[illegible]

伊勢大輔

[illegible]

出花梅とよめる　　桐横

九月ばかりに[illegible]

大貳高遠

しらぬ花梅のうつりゆけばなつかしさ忘れぬ

宮とよさ[illegible]

源重之

[illegible]

宇治殿[illegible]三十講の時行合し

[illegible]

藤原良經朝臣

[illegible]

能因法師

ひとへなる蜂の衣をあらはすとぬぎかへてぞ[illegible]

源重之

夏刈の芦の芽をはきしたをひ[illegible]ぬるなき

曾祢好忠

なつかしの柳[illegible]

初冠詠よめる　源新實

夏の日のなるまで消ぬ氷室の雪ぬるくとけぬる

右大臣

夏の来の月のかたるく入ぬるを屋とまるる小夜の新をこわすん

大貳資通

なかをとの山ゆるる志賀の三ふへきつるよかるくぬるの春の月

宮治前太政大臣の家よ三十講の時

詩合し名よよめる

武門卿長家

夏の暮もすゝる色月新て夜日数の来るとみつ

中納言宗頼

ここ夏の名ハ今夜をるくるゝ山ゆ月ぬ海ぬ志ゆ

道祖の家ゆ

ゆよめる

能因法師

いかゝらんと秋の面ゆ庭ゆ夏ハけさ小嶽のをけ月

郭公初好忠

きてみよと妹の家ゆ小ゆ山ゆ口の地ゆ庭ゆ花

平兼盛

夏ふくなりゆ志ゆ春ゆ海ゆきの杜の下草なて人ゆ

夏ゆ来ゆ者心ゆよゆ

なをなを夏のなごりなれども
雲の内の夜は明けぬれば秋やきぬらん

藤河右大臣

夜の秋は明け方とうかがふ秋をまちて風の音
俊綱朝臣のもとにて

源頼綱朝臣

よみ侍りける

夜ふかの月ふかうして雲の音は秋のやうにて
屏風の絵に夏

大中臣能宣朝臣

つくりたるをよめる

みちのくにあるなん小倉山秋はかのかたにて有なる
泉殿の夏寒しと云心ばせを侍りける

源師賢朝臣

さ夏ふかき岩井の水の音にあきの神すらうらみ
六月祓所よめる

伊勢大輔

こしのうちもあるふるかしかみもなをこりつまは

後拾遺和歌卅第四

秋上

秋立日よめる　法眼元知

たなばたの袖ふきかへす夕ぎりに
あきをかぜ　恵慶法師

浅茅原ものさびしきゆふぐれは
あきをかぜ　藤原為頼朝臣

たちくるあきのゆふぐれ
七月のあきのはつかぜ

一夜のちぎりにあらぬ七夕の
七月ばかりの度申はあれども　大江佐経

いとどあはれかかるなん七夕の
七月ばかりの孫ねぬ夜の衣　小右近

七夕あはれ思ひつるかな
七月ばかりの宮ぬ　恵慶法師

七月ばかりの宮治前太政大臣高陽院殿
ものいとなみけるとこ
ろへ人々あつまりて
恨牛女言志心代
　堀河右大臣

七夕の長歌をよめる　今歌なるべし

七月七夜梶の葉ふかくかけ

上総乳母

あまの河こぎ出る舟のうらのえにかぢとる書たるか

長歌の家にて七夕をよめる

秋の夜はなにをかとはん星合の年にあはぬのふるさけ

七月七夜

梅元任

七夕の歌の枕の俤つもるなりをは

左右の通房

行ゆく一夜ばかりはなれあひぬかりそめ心をまことには

七月七夜おとこの方の事ばかりにて

みはるかすつゆをとしらしなさあひをとそよみはるを

をとそよみはるを

新左衛門

つゆ繁しあまの川なみ波の心なる織

七月七夜風おとづれて涼流れ七夕祭をと

とまりて八月まであるべきあまの川

けるかなよめる

小弁

七夕をあまの川なみ波つゆ

居易初到香山寺

山心はなにをかはるる

いろきりて我てきつし仏里ふいつるとやう秋の月うも
客依月来といあへ紙うへをてこうもよう
仏うあよやう　左を中将公實
又を旅はしへ人まとしうう秋の夜の月てそこ花給へうう
花山院春宮と中うう時閑院おおうまして
秋月とてあそ行うあうけう　大貳三位遠
秋の夜の月ふ出て夜も更わ我も在明のてあうん
之陳大政大臣右右なるる紙つそ前栽うへう

平よ心をくうあもつ十六人へそひて平よこ
仏うう小とと秋月とうあ紙よう　平兼盛
こはりをく毎紙をくすしあ紙そうう秋の夜の月
右都右大臣家よ旅合へ仏うう秋の
月をよう
紙完の月のひうあけはあ末て板屋も秋ハそ　源為善朝臣
河原院ふくよへ仏うう　恵慶法師
すうこうんむうへへあをう宿よて京すうハ秋の夜の月

題しらす　　　永縁法師

あはれつめ人もなかりし秋の月山のあなたの人もまつらん

蔵人に侍ける頃秋南殿の月をみてあそひく

ましり侍るに　　　源道済

我はかりしき雲の上にてみし時も秋の月にはなれし侍る

寛和元年八月十日内裏の詩合によめる

藤原長能

いにしへの月かゝりせは思ふとも猶の夜半はいかゝ新なる（みるらん）

八月十五夜月の雲かくれけるをよめる

前大納言公任

すむとてもいく秋もすまし世中にくもりかちなる秋の夜の月

廣澤の月をみてよめる

藤原範永朝臣

すむ人もなき山里の秋の夜は月の光もさひしかりけり

山里に侍けるに人をまつとて夜侍けるに

素意法師

ゆく人もなき山里にやまきてひとりなかむる秋の夜の月

題不知　　　藤原国行

白妙の衣の袖を霜かとてはらへは月の光なりけり

八月十五夜によめる

八月十五夜月を世にうつしきこの神なりとも恨みぬべきかな

惟宗為経

秋をすぐしてもとむ月をなかめしも秋をあくるもたのしきかな

堀河女院

うき雲ふかいとひし所にて行末遠あはれ秋の月

右近衛

夜原隆成

秋も秋おもひもよらぬ月もかな月ぞ所みるまぎれ

右近衛

あるべき賀の宴の酒盛りに八月十五夜月ぞうつくしかりける

宇治前太政大臣家より侍

道円法師

清原元輔

西の花ぞうつくしかりける

すむ人の数ならぬ身の数ならぬ関ゆゑ

大江資朝

名をとめて月をながめ関ゆゑ

菅原為定

前大納言

年へぬる秋もあらばいかばかりまに秋ぞ恋しき

題しらす　　四條中宮

尋ね人もあらなん浅茅色(?)て月の影をみる(?)しも妙
長根(?)らの風絡(?)り玄宗もむかし(?)におきる(?)かも
そも鳴(?)茅も枯てありとみの花(?)歎行(?)かき
あつまとよめる　　道命法師

虫の音は浅茅か原にあまたして乗(?)秋の誰(?)のこゑかな
是しく次(?)　　平兼盛

浅茅生の秋の夕暮は露のこと恋も物思ひき
大江匡衡朝臣

秋風は小萩か下(?)に吹(?)虫の音の中に(?)さいてかをも(?)

曽禰好忠

おけ(?)やなき蓬の松のさ(?)ちほ色ゆく秋もなきそかなしき

寛和元年八月十日内裏歌合によめる

藤原長能

つゆもこのかけて待らん玉つさにさくきつはかなき稲(?)の声
冬(?)しつるひなの松(?)の声(?)けると聞て
よめる　　赤染衛門

おこるもかねつの床よりそ出しぬれは(?)まし(?)
後冷泉院御時后宮の歌合によめる

伊勢大輔

さ秋ながら春の花のなごりなる有明の月の哀なるかな
八月十五夜殿上の人々とともに詩を作りて管弦
せられし旅中関雁と題す　御製

うしてゆく方も見えて行くもゆくらむ心ぞ知る雁
八月廿日近江よりかへる

道坂の杉の梢に立ちうかれ出るかたをいかにながめん
源俊頼朝臣

長雨の後の月の明しく時は相坂の関の清水に影
禅林寺の人々海の月を山家秋晩と云心
ぬれぬ袖かな　源俊頼朝臣

蓮の浅茅の露の玉の数も数へてあるべ
公春朝臣丹後守にて侍りし時国にて旅宿
志ぶの海人の秋の月を見て
秋風待庵と云心　涼

御製

山里の庵にすましてしかぞ思ふ秋の夜は
しらしらとあけぬるものを

大中臣能宣朝臣

秋ぎりの立ちかくすらん花の色を
あれぬる宿の庭の白露

源為善朝臣

秋萩はうつろひにけり白露の
置きしをりから人ぞ恋しき

藤原為頼

雁なきて菊の花咲くころ
なれば物思ふ人の心なりけり

能因法師

秋ぎりの立ちかくすらん山の端の
月の光の漏りてくるかな

叡覚法師

夜宿野亭

秋の野に宿かりぬれば草まくら
露を枕とあかしてぞ聞く

藤原長能

月をみて

秋の月なれば
月をみて

宮内卿

萩の葉に
秋の来ぬるを
ことしとも
思ふ
ものかな

祐子内親王家の三合より

秋ぎりの
たちかくすらん
山の端の
月
をしのぶ
人
ぞ
恋
しき

大貳三位

秋ぎりの
たちかくすらん
山の端の
月
をしのぶ
人
ぞ
恋
しき

藤原家経朝臣

[illegible]

江侍従

[illegible]

和泉式部

[illegible]

天台座主源心

[illegible]

伊勢大輔

おさめつゝ[illegible]

[illegible]

能因法師

[illegible]

[illegible]

[illegible]

新古今

[illegible]

中納言女王

[illegible]

八月毎日萩の枝小川をへのもとにつゝけり

和泉式部

ゆあんすはたゝなくぬるを家のうへの萩のうへをふえ
そゝかれなりけり家みしをみ侍りけるに萩ちる
はたゝゝ咲て侍りけるを外みゆるとて
とゝ咲うつろひぬれはいとゝ侍りけり

白露もふけはてゝ宿の秋
嵐の萩はゝ侍りけるかな

筑前乳母

梅則長

とゝ咲ゝ侍りけるを枝ふあ侍りけるを
見て

秋風のうつろふ宿の萩の花
君なくてあしの宿の淺茅生にいつ咲也秋の夕暮

藤原頼宗朝臣

原時經

けさこそは野原の露の置ぬるを萩の
世成の上てはなれ色侍りて

素意法師

友原公忠朝臣

いそ道曙の萩すゑの露のかゝるを見しらぬ
袖のうちてし
見しらぬ
藤原長能
さゝ分のすゝく淺茅ぬ末をかゝるぬゝ白露の玉
寛和元年八月七日内裏の歌合のとき
侍従
権為義朝臣
深てゆきもぬゝ色ぬ葉ぬ色ぬ小白露
見不知
良暹法師
袖の道ぬ露ぬ分ぬ秋の野ぬ面ぬ分てそ見へける
右大臣家の歌合のとき
源親範

秋の野ぬ人ぬ分ぬ花ぬ色ぬ見てさへ露の宿
秋前栽の中ぬ花ぬ咲ぬ侍けるに人へ世中
常なき事をとゝひてよめる
大中臣能宣朝臣
東ぬ方ぬ人ぬ家ぬ前ぬ花ぬ色ぬ見ぬ我ぬ心ぬ
人ぬ家ぬ水ぬ分ぬ小女郎花ぬ侍るをよめる
侍従
堀河右大臣
とゝ見へ人ぬ分ぬ心ぬ色ぬ小女郎花ぬ
う人ぬ人ぬ事ぬ前栽ぬ中ぬ侍へ小女郎
けるぬ人ぬ
権則長

女郎花たかうなりぬるかぶ
ふるさとをうらめしうもこゝろ
見しゝ次　前律師慶運
秋風あれはとしたふなる時しくるゝ
ぬるかぶ
天暦御時屏風
猿人の屋に行うゝ
ゆくとよめる　清原元輔
秋の野にあそぶ
毎家有秋
富家小
なるしるへ
なるうつすらん
ゆくりなく
女郎花
見しゝ次　源道濟
ふるさとをみはてぬゆゝしき
女郎花たかうなる秋をかなしむ
槿をよめり　和泉式部
ありそうなるこの屋にさかり
世中にすむ
世をはかなみ
出し次　源道濟
いとしくなくさめつゝ
夕暮の秋と
村上御時
月をこの
行てもあてつゝ
世行
おとしてし行けり
斎宮女御
さてふあやしきなとの
の夕暮の秋

たれ〻右大臣の家の詩合し侍りける

秋風をよめる　よみ人しらず

たきの家の吹ゐそめし秋風の又うら葉にはおとろかれぬる

資良朝臣をさそひ侍りけるに

三條小右近

ゐてたとふるしるべをたにもせで萩の上葉の秋を吹ぬる

ひとりなのめに侍りけるに

秋風のすゑのつゆ　前大僧都寛算

かとはつゆ　萩の葉ゆ人のなげかぬ秋の風の吹しをりにぞ明しつる

花山院三合をさせ給ひけるに侍りけるに秋風をよめる

藤原長能

萩風を扇に吹ゐれる新風をゐ袖にとりあ袖ぬらしなる

山家の雪をよめる

大納言經信母

明やらぬ河水の雪風のうちにとり遠き人の袖をみるかな

右御門右大臣の家の詩合のよめる

藤原經衡

たちかへる風にふるの雪をきしかくかきくもりぬ

野の花紙にてあるべき歟と仰せられ

源師賢朝臣

さてさの心の海の秋の野をいかにもまくの花ぞ

天暦御時は屏風に

前栽うゑ置よめる

清原元輔

ゝ年をとうへてめでぬる宿の萩いまは秋のみさん

桂ゝまつりて小過秋花紙よめる

大中臣能宣朝臣

小萩ゝ花ゝ色ゝ花ゝ咲ゝ海ゝ秋ゝの露ゝ

座移秋花といふ心

開白前左大臣

ゝ宿ゝ秋ゝ野ゝ花ゝ咲ゝ色ゝ見ゝ人ゝ今ゝ若ゝ

思野花といふ心紙よめる

良暹法師

ゝ野ゝ花ゝ心ゝ深ゝ秋ゝ

枕義清の家の詩合に仰せられ

紙にてくさとふ心よめる

源頼家朝臣

ゝ宿ゝ小萩ゝ花ゝ色ゝ

源頼實
我宿にもとをはさひつゝ樫て庵のかきわね聞ゝと侍り
題しらす　良暹法師
さひしさに宿を立出てなかむれはいつくもおなし秋の夕暮
山里にあるこ海にまて侍りけるにおくる
おなしく侍りける人によめる
和泉式部
みなかみも人もみてこし、おなしく秋の山里

後拾遺和歌抄第五

秋下

永延四年内裏の詩合に持衣をよめる

中納言資綱

ゝ衣すゝき秋すゝうゝ初ぬ秋を孫て明しけるか

伊勢大輔

さ衣かけゝゝ衣たてゝうゝ移ゆきけゝそあ人を孫ゝ遠

うゝ孫ゝ秋やゝ原ねんかゝゝ衣ゝうゝ

藤原道房朝臣

花山院に幸せさせ給ひけるに紅葉

すゝの原かゝゝ原ゝ秋の夜の月をそ見ける

選子内親王

いにしきと間ゝ原ゝ時九月に

あまとゝ晴ちゝく紅葉して人ゝかゝるにに

さしゝゝゝゝゝゝあるゝ世あらしとゝひてゝゝ

伊勢

前院中務

月はゝゝけゝゝ風の音さへそ身にしみゝ秋を忘れき

山家秋風とゝゝ

大江嘉言

山里ゝ月ゝ松ゝゝひゝ秋あゝゝゝゝ嵐ゝ木枯の

題不知

源道濟

みくまのゝみちゝかうの里に初てそのこゝろを詠ける

永萬四年内裏にて侍

滿仲右衛

いかなる人にかはしめ時雨ふりみちのくにしかの松のうすくこまに

宇治にて人〻紅葉を題とせんこゝろばせをよめる

けるあらめ

藤原經衡

思ひ川ゆくすゑのなかれてもかの人のこゝろの紅葉のうつろひ

長樂寺にすみ侍りけるとき人のもとにさしつかはしける

なふるとこゝろ侍りけるとてよめる

上東門院中將

こゝにしも木こゝの樹のみちにして康平の比の屏風の絵に車をさゝる紅葉ゆくを

ゆくをよめる

藤原重房朝臣

ふる里にまつ遠ざかるとおもふ人のこゝろをわるる

紅葉なれあさとふこゝろを今とよりは

行ゆくつそふ世てまつりけり

古大弁通俊

いかなれや木こゝの山のおもかげ秋ふるとおもふ人のなかめる

西京にすみ侍りける人の為にて坂籬

菊ばかりをよめる

恵慶法師

うへをなにあるかはしらてをる菊の花をのみ独りとはまほしけり

中納言定頼卿

花ゆへにとはるるものとなりぬれば身をしる雨の降るにぞ

大貳三位

つれなくてあるべきものを君なくて雨降りぬれば菊ぞ

上東門院菊合に行幸ふたつ

まちてよめる

伊勢大輔

めもうまれぬこがねの色の菊なれば坂の上にぞ雨降りぬる

藤原義忠朝臣

後冷泉院御時后宮にて人々歌つかうまつりけるに

菊

大蔵卿匡房

九重にみゆるかぎりは菊の花雨降りぬれば

人のとぶらひけるに

赤染衛門

うつしうゑし心ばかりは菊の花雨降りぬれば人のとぶらひ

天暦御時に屏風に菊植たてあそぶ
家あるじをよめる

清原元輔

うゑてみる人もなきけふの菊花咲つゝ散つゝ経ぬ
屏風の絵に菊花咲うゑたる所をよめる

人の色をうつすとはなしに
かりそめに人の来ぬ間の菊なれど花うゑてこそ帰りけ
ぬ
九月九日に菊を献じて侍るとて

大中臣能宣朝臣

いつとなく侍るとしはこゝにあり
菊の花うゑたる所をよめる

良暹法師

白菊はいつの世にかは植てけん人の庭の
桐模の賢木の間にしをれ侍る道の家にて

藤原経衡

植てみる人の心をそへ菊の色にうつるひなり
立隙なき木の間にしをれ侍る道の家にて

中納言定頼

こゝろ入て菊をうゑてあそびけるにをそ
なるやかるゝ人の離れ菊をうゑ侍りけり

永徳三年四月廿六日 持合り 殘菊をよめり

中納言資定

ふるさとの秋のしるしとそく霜の白菊とこそ見るらめ

寛仁二年二月入道前右大臣大納言

屏風の絵 法性山寺の紅葉をよめる

うすくこそ色もなけれ

前大納言公任

山里の紅葉をよめる

屏風の絵 志賀山寺の男女こもりて紅葉

をりてあそぶ所よめり

平兼盛

山里にすまふ人の家にまうきたりけるに

紅葉をよめる

清原元輔

おもふ人のかりそめにまうきたりける時山里にまかりて袖にあるを

月前紅葉といふ心ばせ

御製

ちりぬる葉八百とふる時ふる本の月の新勅撰

後鳥羽院とうすと云心ばせをよめる

清成

五月雨ちる秋の山をいかにかはまてをかみ花
加賀新中納言親王大井河の夏の紅葉
とすみ侍りける
伯河左大臣
小とね紅葉を過て大井河もこゝをみゆる流の白浪
大井河にてよこ侍りける
中納言宗頼
あらをみてをつる大井河紅葉は色にて過ぬる
永和四年内裏の詩合のよゝ
雜用法師
あら浪しろしの山の紅葉をは白川の流にかけ
藤原範兼朝臣
見わたすあさ地はよ名を秋さ時の山のもみ
後冷泉院の時宮后宮の詩合のよゝ
伊勢大輔
秋の夜の山田のかゝの稲妻の光のこゝてもりはし花
仲賢朝臣梅津の山庄にて田家秋風と
いふ所をよめる
源頼家朝臣
宿りをは山田のひかりにけ吹秋風はまもなくみ
左衛門右大臣の家の詩合の秋田鶴よめる
相模

秋の田のなみたる稲をふかぬ人もなし

原[illegible]

夕日さしかたぶくころの秋をしるかな

九月盡日秋を惜

藤原範[illegible]

あすをのこりいそぎ時雨のうつるも秋はいとゞ惜

九月尽日後朝惜秋

はてはなほ[illegible]ん[illegible]すこしまもくるる秋よ

九月盡日伊勢の[illegible]

大貳資通

年つもりいそぎ[illegible]ふるとりの秋の名残

九月盡日よこ[illegible]

法眼源賢

秋はてゝ[illegible]ぬ[illegible]ぬ[illegible]

九月晦夜よみ侍る

源兼長

春すゝなりそ[illegible]

秋の[illegible]

後拾遺和歌抄第六

冬

十月ついたちふつかのころ大井河に
ぬるをて手まみ侍りけるよめる

前大納言公任

やらけすの紅葉とみまがふ大井川なほ秋なるもいろ
十月ついたちのころ紅葉をよめる

僧正源覚

高しまのさき紅葉の紅なる月はなほ秋の花
寛保三年十月今ゝ河内国大井河

河ゝ三ゆきの行ゝにうきぬれば
れ紅葉

大井河のもみぢ葉をよめる

桂の山庄にて時雨のいたく侍りけるに

よみ人しらず

藤原兼房朝臣

袖ぬれて絶えぬとゝとする時雨かな紅葉を人にこえぬすまれ
山里の時雨をよみ侍りける

永縁法師

神なびのゆくへもしらぬ桂をもしたれてゝ山のこ
落葉をのおとゝ云心をよめる

源新興

友原家經朗氏

十月廿五日山家のうらにてよめる

紙園法師

梅義通朗氏

中文内侍

藤原孝吾

堀河右大臣

桐模

難波のくにあさかといひける所にて詠ひすらに遊

題しらす　　　和泉式部

さひしさに煙をたにもたゝしとて柴折くふる冬の山里

冬の夜の月をよめる　　大弐三位

山かせに名におへなりけりみる人の心をはらふ冬の夜の月

題しらす　　増基法師

冬の夜にいくたひはかり寝覚して物思ふ宿のひましらむらん

障子の絵に鷹狩したる所をよみ侍りける

民部卿長家

みやのへる志らふかきにかとそなくなるけのみをはかへせる

鷹狩をよめる　　能因法師

うちなふ雪もやすからぬみかりのゝ雉子の跡も尋ねかりより

律師長済

ふゆかれも霜枯ゆけはかりかねのあさゐる雉子のかくれなきまで

とよめる

屏風の絵に十一月に女の家に人のきたる所に

大中臣能宣朝臣

霜枯の草のとさしはあたなれとなへての人をいるゝものかは

霜枯の草をよめる　　少輔

さしもかれしひとつはかりにおかれたる草はみしなきものをあやにくや

霜の置葉をとうけりとていふ心をよめる

讀人志らす

おちつもる庭の木葉をよるのまにはらひてけりとみゆる朝霜

霰をよめる　大江公資朝臣

杉の板をまはらにふける閨の上におとろくはかり霰ふる也

山里の霰をよめる　橘俊綱朝臣

とふ人もなき芦ふきのわか宿ハ霰さへをとせさりけれ

永承四年内裏の歌合に初雪をよめる　相模

都にもはつ雪ふれハ小野山のまきの炭かまたきまさるらし

埋火をよめる　素意法師

埋火のあたりハ春の心ちしてちりくる雪を花とこそ見れ

後厳式部卿のみこの家にて松上雪と云心を

人々よみ侍りけるによめる

藤原国行

あさ雪も松の下葉ハふりぬれは冬しも濃き松にて有けり

隆経朝臣甲斐守にて侍りける時つれて

くたりける　紀伊式部

いつのまにかひの志らねハ志ら雪のふかくもとしハつもりぬる哉

山雪をよめる　能因法師

紅葉ゆへ心のうちにしめゆひし山のたかきハ雪ふかき也

題しらず　源道濟

散かかる雪の下ぞ消えはてぬ山ぢとしるき春の来ぬれば

慶為法師

来しかたをみ渡すまでに春ぞ暮れぬ

藤原國房

いかばかり雪なりしかと思ひやる井手の山ぢも春ぞ暮れぬる

懷旧雪と云心をよめる　律師覚圓

独のみ花の盛りを過ぎぬれば降りつむ雪をそらに見るかな

屏風に絵かきたる女の物をながめたる

不知名人

春やとく風ふきぬらん白雲の山里はなほ残りぬるかな

道雅三位の八條家の障子に山里を

雪の間はまきの戸をとぢめかな

藤原經衡

雪ふかき山ぢ分けたる人ぞ見ぬ

源頼家朝臣

山里は雪にふかくぞ成りにける　法師はかりぞ飯室よりける

人の見ぬ人つぐ山に雪の間

はるか

心なき道芝の露をかこつかな　信濃法師

絶えぬとは　和泉式部

ふりつみて人も来ぬ宿の庭の雪　清原元輔

天暦御時の屏風の絵よ十二月雪ふる

雪の白ゆきとそ人の見まがふ

たちけるか　入道前太政大臣

おなじ絵書けりける心をよめる　藤原実方

雪降ぬ物ゆゑ朝ぬれにとそ

物思ふ　前大納言公任

雪の白ゆきたにとまらぬ

為氏卿家歌合　頼慶法師

さむしろの夜の衣かたしき

寂覚法師

はかなくまこと河やこほるらん

入道前太政大臣

物をよめる　僧都長算

鶴ゑ英通に分け出る

雪降ぬ物ゆゑ朝ぬれにとそ

物思ふ　前大納言公任

雪の白ゆきたにとまらぬ

為氏卿家歌合　頼慶法師

さむしろの夜の衣かたしき

寂覚法師

はかなくまこと河やこほるらん

入道前太政大臣

物をよめる　僧都長算

鶴ゑ英通に分け出る

影不知

曽祢好忠

宿すまは水の心さしみてぐらゐ玉井しみるもとゝかこそ
水遊秋船といふを

藤原孝善

むとせ玉の秋を過ぐしてゝ池に長雨の降るを
後之除院春宮とゆかりの時殿上にて人々
歳暮のうた詠ける

藤原明衡朝臣

身にしらるゝ歳の暮かな
中二月海日あり海前国より賀状

源為長朝臣

はるかなる
故へ人をとゝまる秋の夜の
庭にて長き月をひとりみる

後拾遺和歌抄第七

賀

天暦の御時の屏風の方に春日

ふるとなほ雪のうちにはるかすみ　源順

今は横雲の賀しるかりの屏風より

かりのつらにたなびくかすみよりも

行末ながくかすみのみちすなり　平兼盛

月屏風にかりのつらにたなびくを

よりて

ひとつ野と雪の時にはみてゆきの遠きかりにて

東三條院三十の賀しるかりの屏風より

子日して男女車をやりて小松ひく所

よめる　源兼澄

あまたたびかくなれにけるかりなれば君が齢ぞ

前大僧正明尊九十賀しるかりの屏風

おなじ大臣行の杖つくるかりの屏風

よめる　前律師慶暹

天延四年九月十日の夜の夢に

思ふ人の光のさらゆく杖ゆえ

月袁の屏風にいのりかなうさ〳〵の家にて
詩あり示す　平為盛

春秋もたゝて世ふる我身かな　我身ハ松と鶴と色をかさねて
屏風の絵は海の内そこのこれも一分あるか
とよめり　源為澄

一すゑの松のみとりたのもしき幾あさへけさの世とこの時
忘れ石云　後人云

君か世ハなかなとこの常盤なる松の緑も我をしたれて
後一條院むしさせ行く七夜より人〳〵
内りく侍るあ女房さ〳〵月いさせと侍れ

絶ひきひろはりふさ〳〵月さそ絶なるこゝそ番もさそわ
後朱雀院うまさせ行ひく七夜より
よみ侍る　為大納言公任

いとをあれ心の袖にせくこゝろあるのうへとなるそつゝ
忘れ石云　後人云

君の式部にあるこゝ松ゝひ女あるたまるも
ある人云ハ式部ハ紫式部ハ中納言定頼の
よめるとか

故第一親王うまさせ行ひくうらつゝ

前斎宮生母行て内裏をうかゞ
ひとつつゝ今宵後伺ふよりの
右大臣　頭房
ゆしたゝ毎の今宵の三家生まれ松の二家なり
女将敦敏こむまれ伺ふもよりの
清原元輔
姫小松はなれて山の陰なれ
迎房朔に生て伺ふ
つゝとてよりの
右後宋
ゆしたゝ毎の今宵の三家生まれ松の二家なり
月七夜なりの
毎年の心の伺ふの
故第一親王の
きこえあり
けり
右大臣
ちゝ毎の三家の松みて
陰子たちを冷泉院
行ふ

世の事ハかなきものなれとこれ程花咲こうもりぬるを三ハ
後三條院ハ子の言葉とゆ[illegible]今上ハ[illegible]
ておそ[illegible]ふ[illegible]ふ[illegible]ものあるを事をそみさ[illegible]
せそしはつみをこよとて行せうの[illegible]
よみ侍る

左衛門督藤原為忠

恋みしはけりもかなて百代の齢をかさねとも流れ
ハ

同院殿賜ハ[illegible]

くもりなき流の光ハ[illegible]ハ照ん新なる[illegible]
むまこ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]
落ハ[illegible]の毎ハ[illegible]

せゝ侍りをるよ[illegible]

藤三位

心を屋しなき流の子ハ[illegible]ハ[illegible]
紅葉守為光ハ[illegible]
て哥よめとい[illegible]

清原元俊

義代をそへん相ハ紅ハ[illegible]
人ハ[illegible]
[illegible]ハ[illegible]
人の相さなきをそ[illegible]

あきとせさ世をかさねて世々を経ぬるかなしはしのひはてまほしけれ
かたらけるとてよめる　源重之
ここにあまた千とせのこゆるかひあるかな松原の露やしもはおける
大中臣輔長の家にて内外戚の
たいかりて輔親公資の祖父のとみてよめる
藤原保昌朝臣
かくしつゝ世をや世をへむすへらきのこのはしめりにけるこの世をやたのまむ
三条院のみこの宮と申しける時帯刀の陣の
哥合によめる　大江嘉言
君か世は千代に一たひゐるちりの白雲かゝる山となるまて

承暦二年内裏歌合によみ侍りける
民部卿経信
君か代はつきしとそ思ふ神風やみもすそ川のすまむ限りは
宇治前太政大臣家にて三十講の後歌合
侍りけるによめる　藤原為成女
おもひ庭はいく千代へん人の君かためにいのりこゝろにかなふいのりを
永承四年内裏の歌合によめる
能因法師
春日山いはねの松は君かためちとせのみかは万代そへん
同歌合によめる　式部大輔資業

君か世は志賀の松に千世ともいはまかくつもりそ（人しれん）
冷泉院にしめてつくる世々の水をとせきん（に）
もちゐ紙にかはらしてよみ給ふ
後冷泉院御製
岩くゝる瀧の白糸絶せしてひさしく世々にへつゝみむ（見さ）
東三條院にて春宮の御行ありて池のうき草
おもひをはるに給ひけるによめる
小大君
君とみねはこゝに水も色ことなりし心ありてみよ
関白前のおほいまうちきみ三條の家にて
えし給ふ時池の水もかくすめるとぞいふ心
人々よみ侍る　藤原範永朝臣
おもしろく院と見る池の水千世へてすまん影ぞ見るへき（しき）
後冷泉院御時丹波守にて侍りける時ある国の
除目時祭の使にて藤花をかざしてはべりけるを
みてよめる　良暹法師
千とせへん君かかさせる藤なみは松よりこえて所なりけれ（まさり）
後冷泉院の御時大嘗会の悠紀屏風に近江国
国亀尾山に松多生たり
式部大輔資業

万代を垂れてみゆる松の緑は
たのもしき岸風は大蔵山をよわる
うこゝ数なる紀大人ふるさとを
陽明門院を絶て伝はらぬ世紀行をきて

江侍従

宗の宮は絶なる勇を化をたゝけときくまゝ
うゑ枝をりれ

後拾遺和歌抄第八

別

恵慶法師

恋主頼親の朝臣へ下りたりけるに
野の尼山のおくをふかしとゝ詠とすると
いひつゝ行きはて

紅葉ゝんおりの結てすくなきこゝ君なる井せゝ詠とは
ゝ

恋主頼親

ゆゝしき色を松のおくまちわ秋のうらまはゝ
ゝ中へ今ゝ山のとにはすりうるとけるり

[illegible]

つゝみなくいはんとて物もいはしに都のうたの人のつきゐる
あつまるとなりに意と出る日よりも

増基法師

都にうけさりくふるつゝみあるあひみる人をおもふ

遠江為憲の中へくだりたるよりの
扇つかはすとてよめる

藤原道信朝臣

つゝまてうよとせのまてそうとしたの都にかゝるとこせよ
又のとしの越後のかたへくだるけるふ遠江のかたへ

徳為若朝臣のもとへつかはす

藤原惟規

遠江の国にくだりなんとしたる都の人のもとへ
中へくだるなんとしたる
よみ人しらず

扇つかはすとて

右原長能

よつねのかはかはりにけるかはなりにけるかはなりにけるかはな

題

いつとなく世をみなれる荻風よいまは松をこそとらるる道
人の遠きをかりぬるなり

藤原為正

荻原道信朝臣

世をいとふ世のつねとはいとはねど人の構ひのなりぬるかな

つもりゆくこのみちはてしなかりけりてみるとはなしに

藤原倫寧朝臣

君をこそ思ひ出でぬれ心にはあはれ未だきかぬ人はなしと

題

我ぬしのこたのまとはいとはしまつ松の世をこそ君にそなれ
はてはかりなりゆくなるかなれんとて家あるなる人のもとにつかはせる

入道摂政

法因法師

山ぶかみ月をみるとはいふなれど我もとはぬ人ぞなりぬる

源頼清朝臣

みりぬるかの住てみしこれなりてうとをけるなり

相模

宣ひくらの長盛ら小者やうに来れりしを相原
豪言対馬守みなりてトの名ゆ小かた
つとてつかうまつりける
いとけき我家さへ強くへかかつうまつりてうれしく思ふ
対馬守小かりく面をとりけるゆゑ小
つかとうを結同じ姉へをとこつかうまつりける

大江豪言

敵あらは今かてうえに向のなまえ備はの美をを小
極則光ら小ふ小ふ

中御門宣頼

りうめのあと心と白河のへ世をうめれ海かり名
義通羽に十二月に比ひ宇佐役小さ管
けるり年明てうり小行さん事をとうで
餞行名りりうさ弟をとてうみ名名

極則長

別所ら別ふ名もう所ふ所気を井小さうとすん
にて〇今夜人りひ出をなひけ行んとて
人さうけうりへてひをひ名よあそひて衆
やり文をてまいれ小ゆるをとひうさして
ふさ名名

慶花法印

後よりも我うつしきゑんかと成給を歎て
津の国に下りて住侍法師つかはしける
つらゝ
つるゝ人の世中と思ひしるしるしの梅
良暁法師
なをりあひかと思ひて友なひつるに成
雑同法師伊与国にまかりけるみちにて
たみそよめる
藤原家経朝臣
長月花秋の間に契りつゝ子成りとゝうる
雑同法師伊与国にまかりけるに
ゆくへなくまよひぬるかな
源道長
ゆくへなくまよひぬるかな
かふ人のみちにはつるはつかけ
源道濃
思ひよりかはかぬ
雑
平よみ給ふ
三月ばかりあるに

さわき(海)をしづめてけり

中納言定頼

おもひ(思)のみ滝はいとゞ(いと)はひろ(広)くて思(おもひ)ぞ(ぞ)乱(みだ)れ

源光成

きてゆくと(ゆくと)思(おもひ)ぞ(ぞ)ある(ある)

あ(あ)ぢ(ぢ)の(の)ふ(ふ)ま(ま)き(き)ぬ(ぬ)れ(れ)けるかな(かな)

あ(あ)ま(ま)の(の)し(し)ほ(ほ)や(や)き(き)ぬ(ぬ)れ(れ)ぬ(ぬ)ら(ら)ん(ん)

伊賀(伊賀)ふ(ふ)さ(さ)ぶ(ぶ)らい(らい)けり(けり)ふ(ふ)ん(ん)餞

行(行)けるふ(ふ)ぶ(ぶ)けり(けり)て

源道成

おもひ(思)ぞ(ぞ)ぶ(ぶ)ん(ん)ぶ(ぶ)ん(ん)ぶ(ぶ)ん(ん)

大江公資遠江(遠江)へ(へ)下(下)りけるに十二月廿(廿)

ふ(ふ)ぶ(ぶ)ん(ん)ぶ(ぶ)ん(ん)ぶ(ぶ)ん(ん)

源為善朝臣

なに(なに)ぬ(ぬ)ぶ(ぶ)ん(ん)ぶ(ぶ)ん(ん)ぶ(ぶ)ん(ん)

年(年)ぶ(ぶ)ん(ん)ぶ(ぶ)ん(ん)ぶ(ぶ)ん(ん)

あ(あ)ま(ま)の(の)ぶ(ぶ)ん(ん)ぶ(ぶ)ん(ん)ぶ(ぶ)ん(ん)

しけ(しけ)ぶ(ぶ)ん(ん)ぶ(ぶ)ん(ん)ぶ(ぶ)ん(ん)

何(何)ぶ(ぶ)ん(ん)ぶ(ぶ)ん(ん)ぶ(ぶ)ん(ん)

相模(相模)の国(国)へ(へ)下(下)りける人(人)に

橘道貞武部(武部)丞(丞)

行(行)き(き)て(て)ぶ(ぶ)ん(ん)ぶ(ぶ)ん(ん)ぶ(ぶ)ん(ん)

源重清朝臣

ぶ(ぶ)ん(ん)ぶ(ぶ)ん(ん)ぶ(ぶ)ん(ん)

赤波来

世をいとふ心ふかく別て坂のの月を
なをいくかへりの後の月をかへ

中原頼成

いつりを志の別の後かなしとて波のさとをうん
ぬ月はまてはかりて待もなく老をかなしみ
後の月をみるとをみるにつけてあり
あきらめて四りせる月をとはけるをよ

参主情親

あふ事のをを井をうふ情のをを心をうねかとあり左
波のまをうをうをとあり

菊原節信

ふるをとをとをうををふ人をあるとと
波のみをうをとをとをうをうをうをうをうをを
をうをうをうをうをうをうをうをを

連歌法師

波の舟をまをうをつををうをなをふををあをの波の月を
おををを

麻呂法師入唐せんとて筑紫にくだりて海をわたりけるに
七月七日舟出せんとするよつけ侍る

前大納言公任

ひのもとにかはらぬかぎりかはらけをいつもちかへわ舟出せ
入唐しける道にて海に侍りける

麻呂法師

ちはやぶる宮もいまはあふぎ見ん雲のかなたにそきけ
法師まかりわたりて後かの母の
もとにつかはしける

源人志

いかばかりかなしかるらん別れぢ

後拾遺和歌抄第九

羇旅

石山寺にまうでゝ侍りける
ものゝ
ゆきかへりて
侍ける
藤原長房

逢坂の関とはいへど君がゆく
道は人目の関もなきかな

十月ばかりに
はるゝ雲なきを
前大納言
公任

ゆくすゑの秋の空をぞ
思ひやる
雲ゐ
中納言定頼

常盤にて、そぎ立たれる
能野の
けふ
花山院御製

懐円法師

加賀の
能登
文時

山ゐんかさいなりとて思るしの峯にて秋月そまもるて
舟みてりて淀江てい不をを行るをてよめる
をしてをりおいは世るの思ひあり下か淀江のそをつをて
津へ不へまるをけるをるを
友原国行
芦の屋の屋のてりに月をを言わいつりゆくらん弱よ
ひつりへ雨りけるをるを
僧基法師
都のをかりををて東路を弱へるをるゆく
都東に下行るふ東都島のの小嶋るを
をてよを行る
知家卿
をくありけるを都をこ代を洗きをて
所月をるをに近江下るを山て面
あひてよめる
恵慶法師
瀬山ゆふをも基面の今をるをやハ人ををけ
七月ついるをて行るふ下行るに関山をこ
ゆるを志を車をとをめてやをみをよを行る
赤染衛門
越をて八都も遠くなれ雁の風ををを

[illegible]

増春法師

[illegible]

良道法師

[illegible]

[illegible]

[illegible]

都をいでゝ秋風うたて白河の関
出羽にくだりてゆきはてゝいと
所がらよりて
世中にてたえてなきさうの蝉の音や秋の哀はして
つゝこゝろけう道おくすゝの海にて
ゆき行ゝ
大中臣能宣朝臣
白浦の浦風ふきたゝとゆふ波にたつ
世ゝ小白ゝたゝとうゝ小ゝ屋くとみて
よゝ
大貳高遠
風吹ゝ小ゝ白ゝ波ゝ小ゝ白ゝ波ゝ小ゝ白ゝ波

いちにんとりけるなかつきの月のあるかの
をよりの　康資王母
月のうちをみるにまなみの物ゝあるし郡のうらの海の
宮仕仕そ侍へ海のけるをて海と
行月とふ心をよみ侍る
梅為義朋臣
郡のうらの山のふもとに月影をとゝめて浪のよるをまて
侍るよりをて月のあるを見よみ侍る
友原國行
こゝろをしるしるふるさとの月八人を
侍りけるをてをしみ侍る
西宮前右大臣
七日まあの宮にまゐり申侍あふをそへきまをよ真の海
つゝよりけるに明石とよみをてまゐ
侍る
師前内大臣
物をふ心の屋にて見れは明石の海のひかりかな
お雲四まのうをを海侍る
中納言隆家
さををて月都のうらふ屋にて世をうをて海けを筆
伊予國にて十六月十日舟をてていうき

西方にかりそめ

武蔵国貴葉

いさ川に舟出をしつゝ年月の西の郡にすみあるく

つゝ西方にかりけゝる道のさゝ山とぶ

所にて所よりの

石大舟通後

わしにあくせとの塩あひみ舟ものくるゝ

越後りのかりそめ山

月のつゝ西方にて

梅の仲間

こゝにて三月みかこひみ屋のくるゝ

出乃江西尾よりのかりそめ山のくるゝ

乃乃西尾よりの

乃乃西尾郡にてあはれ山行嵐傳て

おかし乃おく

さ枕ゝけゝ年にあらしやいなん行浪の舟まる也

源乃海

後拾遺和歌抄第十

哀傷

一條院御時皇后宮うせ給て後帳のもと
にかくなん書つけて侍りける文紙にも
うけ給はりけるすゑ
かはかきつけ侍りけるすゑ

夜もすがら咲き乱れおりし梅の花の香を
忘れぬ人もなき別れかな

煙をだにとどめなかりける道とは思へど
なほ恋しきかな

なほとはるかにひかれ給はぬなげき

源道長

あはれとも限りなき御事なれど世と共にうん
ぬるかなしさ

山の小雪とて侍りける歌の人なとりもちてみて

和泉式部

行くえなしとは

きりの焼け原に又秋の人のくうん

三條院の御宮うくまに行くはらそうに

夜月のあるかなきにより

命婦乳母

なきてくるしくしたんをくはりてとうにすめる月をあ

月輪院殿法皇うせさせ給て宗野より
葬送よりなりて一ヶ月せさせ給
へまひし事をとゝ[illegible]
宗野のけてとゝ[illegible]
右大将別光
春の霞よりてうんとハ
大内を行成
なりまてとつゝ[illegible]
長保二年十二月廿日宣旨せさせ給
さう地の東西ゆ[illegible]
一條院ハ崩御

[illegible]
入道一ノ宮くまさせ給て十日
よりてゝ入日相模ゝ[illegible]
くまはけそう[illegible]
二月十五日[illegible]

法橋志命
野ハ霧の林のくらして
葬ゝ[illegible]
小侍従命婦
[illegible]
[illegible]

のちの相模かうとゝかつけるふ
ふしへの新もゝよの君の世もたゝそめをみるうゑしき
哀
相模
時しも秋はなの中にあ屋まさめ哀の姫たうるひを
三條院の時皇太后宮の屏風に行けるなす
時女房人々にけうまつりけるに人のを給るれ
けうとうに哀きことにけうまつりるに
山田中務
地をえ秋はなの中にをとをさうを長かるき秋ふあひ
おなしけうに宮ふのをふのけうに人のをふつりけう

相模
ふてやとゝ屋ゝ屋ゝふ霧はけきをいふ地君ゝ袖ふ行ねや
哀
大和宣旨
後川ゝ殿ゝ水ゝ殿ゝ祭ゝ袖ゝうをゝ人のゝふん
後一條院の時の中宮九月ゝ日ゝ行て
坂東雅院御所ゝ文殿ゝ中宮八月に
ゝ道行ゝ人ゝ袖ゝ哀ゝ行ゝ任ゝ哀ゝ
ゝをゝ
前中宮出雲
いゝゝ君ゝ袖ゝ秋ゝ人ゝ君ゝ秋の哀
右衛督經成朝臣西ゝに行ゝ見ふ

いとうとのあつひろとき卿師賢卿にありて
仰ごとつかうまつる　小左を
はしきて神もうけき柏木のもとにあるまそ屋道
灵山ふこもとうろ人ふあうえて夜うりうり
うろう月夜うてはつ十三日ふあうてぬいと
をとき仰ぐ　紙屋法師
思しかとあるる人へなるなを宿の月記うふはまたうる
右兵衛佐後實員の子あをとれ歌仰ぐうひ
ふうはつをきを別面れ木枯の時ふ宿の秋の名
右大臣ふ方

歌をはりて時うふ山ふ仰ぐうへのまとに何か
をうけう　後人正之
山里柳の紅葉なふうこれをふをひうらん
お羽の弁の御やはあれふ仰ぐうを歌をあを
つやとふを言なる事をいひつかけに
よみ仰ぐう　前大納言隆國
はやをつるまをうへの思ひさいふまをあをきからをいを
西　出羽弁
ふをしさをあをひふ何紙ふ宮を海あをを三月ふ君ふりせハ
高階成章ふらふふをれりけうをきてい何ふ

[illegible]

中宮内侍

行末を今しはそなふる身なれとも
清原元輔のとしとそ定方海ゆかくらは
そなく関ちるしえ浦ゆとふひつかはて

源頼

よしの山の花とぬよきをいかはてくるかとそ思ふ

梅則長

梅則長ありてうしに相模うと

梅季通

ふしつや思ふとうるよもきはつまをるの別ありしを利
後於京洗れ時ことをまてはうみ

伯[illegible]せもうぬとなて上東門院の
こハせ行るはをうまてまつりけ

式部卿

[illegible]屋まかをうつ祈[illegible]
後三條院位よりはをいて出すを心つく
なく墨くして六月一日又うをうるをん
[illegible]伯[illegible]はを先帝れるをとをしをり事や
伯[illegible]よめ

同陽内伯

六月晦ふあるをわをふを晴をあて空て出きせをを
二條前太政大臣乃女なるをを行て怪ちうをを

見てよろ

あふてくおいとこうしむ　中納言殿母

子ふとれく侍る　比丘尼ふみく侍る

うて祢の比世の愛ふ　菊原寿方羽代

ちて男まるとく侍　けっみふよ侍る

愛みすと歌し人成羽　菊原相州羽代

い平の乗田右衛門　なるまこ口愛よ

よ父の相州とのみ　して侍るる愛てみて

あふ色き君をえ祢　まれ侍も歌うさ

やよみく祖をく男　田ふ見ふ侍る

とのいひはうへう

物ひ侍けう女の　なを男田ふ侍

女の母屋のとふ　さく侍

菊原寿方羽代

契りてい世ふ又ひ　まうもおもうりてみ

一除構ひ男まる　ふとく侍ふ事なて

人ふりもに侍る

廿将菊原義春

とハさてをひつるもむしろ色のうちに小ぶの牧なるしへきを
小武郎由伯ゟ被ゝ被ゝ被ゝこゝ
みく候伯ゟ
和泉郎
ゟ
ゟめとさて注進状と云ふんこゝ伯ゟ
一陳院ゟ也ゟ所行ひくゝ被ゝこれ所伯ゟ
ゟを後一条院おさゟおゝゟゝなふゝ
もしゝてゟ所行ひ是ゝ伯ゟ事や
ゟ
上東門院
ゟ
ゟ
道信朝臣とゟ
ゟ

伯ゟゟあかゟ人ゟ伯ゟて秋ゟ伯ゟ
右京賢方朝臣
ゟんとゟひゝ人ゟゟ清ゟ伯ゟ牧ゟ秋ゟ
五月ゟ比ゟひゟ安ゟゟとゟ伯ゟ
ゟゟけゟゟゟよゟ
大江匡房朝臣
ゟ月ゟ伯ゟ五月ゟ伯ゟ定ゟゟゟ
思ゟゟ伯ゟけゟゟて京ゟ伯ゟゟゟゟけ
ゟ月ゟ伯ゟ
大江素言

なみのうちにいろを部よハ行へきこゝもなくなり
敦道親王うとくなりてよみ給ふ
和泉式部
しらてなをよるとなくこゑ出くるかなしきものハ
ねぬ人にあるとしらてよこ給ふ
なをなをとおもふ人をそ出し君なり別れ我身とゝ
十二月つこもりの日なをなをとあるかなしきけと君をしらぬ宿をとをかき里
右大將道房為四位蔵人のとき
帳内小人のみきりをみくるをみて
ゆ張の人なくなりもあるとこゝ
ゆてうの日のうちにゆきまふ行ふそこは
ゆうもてよこ給ふ
大貳高遠
思ふかなる夜なかをまてに世中のうかきをいとゝ
遠經朝臣
ゆうをとうの給ふ
越前守よりめく
なをなをとゆまうとゆまうの後小
源道濟
女房言なくしてとゝ

うりけう百和歌ばかりいと美しきを人々せうとの
棟の殿の弱たかとおぼしてかくなん

選子内親王

清少納言のもとにつかはしける

世の人の言ふなるかりて侍る
よすがりぬれば
ものとふ人もなかりけり

清少納言

返し

ものさしてからの袖にあらめ涙ぞ
服ぬぎ侍りけれ十月一日おなじ海なりの人
なのゝ[illegible]たしはしするとはとむとこせて

侍りけれよりの

君のゝ花の[illegible]ゝ袖の色にも秋の
赤波更衣小[illegible]
つかはしける

義孝の侍

康資王母

[illegible]波の袖にいと忘[illegible]
因幡院侍[illegible]せ行ひて[illegible]年のれて
つかさとして[illegible]く有[illegible]内侍よ侍るれ
乳母の方三位の[illegible]紙よ光[illegible]
のもてすもとてかきてさ[illegible]せ行ひ[illegible]

一條院御製

み紙をふくみとゞかふは都より蒙人やつかはしてそ

後に泉殿位にゆきてをれみるに八重はさかり

おはるゝ人の名の秋、東三條つねのまゝ

りうえゝ侍りゝ者きゝ紙人のかりゝてまゐり

きゝりけまは

簾景殿前殿師

小枝ゝもゝ色ゝてこけまゝ萩の花の秋は

如順よとゝれ侍ゝ人の色ゝその口ゝ侍ゝ

あけゝゝ日かりゝゝ人きゝていきゝゝ人ゝ出ゝき

色ゝとみ侍ゝ人ゝ人ゝ色ゝそゝ

伊勢大輔

ゝ

紀時文

清原元輔

ゝ紙ゝ人ゝ必ゝゝゝて後の八月ゝ侍ゝ人ゝ出ゝそゝ人ゝ

後一條院御時皇太后宮ゝ行ゝ

ゝゝ人ゝ出ゝ車ゝゝてまいゝゝ人ゝ

名ゝ言ゝ人ゝきゝゝ人ゝ

とゝゝて侍ゝ人ゝ八月ゝ

ゝ

仁位侍従

我身よりの外、妻幸代、長女はなを始めとして、家来
ども、服ぬき給ふ日より
年棟仲
心をもつみ、後世をみ、後の衣をぬぎて、四月五日より
弘化元年、衣の袋門ゟ出ス、服ぬき給ふよりの神
安政元年、十月十九日、夜八時、
菅原宣輔卿
十月十九日、夜八時、一條院
ふとて東城に入くる、給ふ道、ひらきやなと
給ふ事をみくるよりの
赤家来
きくるけう、書ける、大内、城にて、姫と、書し、君ゟ此
黄、梶樹院ゟ後一條院の御新をうつして
給ふ、城みくるる中ゟ事をと、思ふ
ま給ふ
出羽弁
いかにくらの、とわ、ん、ま、井、てあ、ん、花月の光を
衡
逢、房ゟ、をくまて、後、ゟ、給ふ
ゟ、あ、て、ま、さ、家、ゟ、ゟ、ま、て、給ふ、ゟ、ま、安

そしらぬ世をよとてはくもの年をあかく成て後
こゝろにくれんよめる

赤染衛門

徒てあまぢゆく床の草ねをみるに有
絶野ふまうて行るゝ小一条院かよひ
行るゝなみとこゝろ
心ゝ出くるよめる

原信家朝臣

ふ〳〵おなふ〳〵の事もかゝる世のうらひらの
かくるみて行るゝを
かゝとにつゝるける

伊勢大輔

ゆゝしき屋ゝ荒ふ〳〵浦さびて芦のうきねにはうをゝ
秋ぬ世のうらゝけるゝ河ゝ出てよめる

原重之

色とふむしの遠くゝ
たゝけるゝ河ゝ
いにしへ
うゝ
女御ふ
つゝ
ゝ
ゝ

ありとゝるゝ秋ゝ
ゝ
ゝ

時雨とらくはの紀うたのまふ仏の恋ま袖ぬるそらん

山平は義孝の後ろ拾十月の雷

賀縁法師八首

夏ふかぬうちよりけふ雲ふ

ものとみるかなとふ地をてるまにるん

伊勢の母恋かくうりあるうよりけふて

ふとそ思ふれ

ちんいそひ

立て名流れ衣神もかおれ秋よ

山寺の八月四日とく侍る秋

りての美ま廿将義孝ニ平そみる

逢事をみれ書ふふてと変ものてひるの

あるへ人いとく世ふ宗ふきてあさう

けう男のひとものの美ふ物をかの女り

ふ世よとてよみ侍る

ひとものの女のとふ風をてよみ侍る

讀人不知

なくしも君ふ八つ雲のきんの文ふて

女みしうふてなるまふ侍る

さきふの源氏の君ふ

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan